

## 小学校社会科に 「軍神」復活

東京のある公立小学校六年生のクラスを使って、東郷平八郎を教える授業の公開研究が行われたという（「赤旗」一二・一一）。公的な研究組織である某区小学校教育研究会・社会科部会の企画らしいが、戦前軍国主義のシンボルだったかつての「軍神」東郷平八郎が、今なぜ小学校の授業で取り上げられなければならないのか——当日の授業案にはその理由として、「新指導要領で例示された四十二人の一人であることが第一」と書かれていた。

新指導要領（一九八九・三・一五官報で告示）小学校社会科六年には「大日本帝国憲法の発布、日清・日露の戦争、条約改正などについて調べて、国力が次第に充実し、国際的地位が向上したことを理解すること」（２内容一（1）イ）の記述があり、取り上げるべき人物として、

「明治天皇」「東郷平八郎」を含む歴史上の人物四十二人の名が列挙されている（3の内容の取扱い（1）ウ）。目下各教科書会社は新指導要領に基づく新しい教科書（九二年度使用）の編集作業中であり、上記の人物が教材としてどのようにとりあげられてくるかは今のところ不明であるが、前記公開研究の授業がそれを先取りした試みの授業であることは明白である。「赤旗」が報じた当日の授業の概略を示してみよう。

授業で扱った小単元は「条約改正と日清・日露の戦争」。授業はまず、横須賀の公園に保存されている戦艦「三笠」と東郷平八郎の像を映したビデオの上映から始まる。子どもたちに配られたプリントは戦前の国定教科書「小学校国語読本巻十一」所載「日本海海戦」の一節の現代語訳。教師が音読する。「午後一時五十五分、我が戦艦三笠は旗で味方の各艦に合図を送った……皇国の興廢この一戦にあり。各員一層奮励努力せよ」。

日本とロシアの兵力比較表などの資料

が示され、「日本はロシアより戦艦も大砲も小さかったのに勝ったのはなぜ」という疑問を子どもたちから引き出す。軍艦に擬したマグネットを黒板に配置して、「丁字戦法」「東郷ターン」を教師が説明する。「拍手もんですね」と教師。子どもが拍手。日本の勝利に、いかに外国が驚き東郷を絶賛したかを教師が話す。

思えば戦前、上掲の「国語読本」を暗唱するまで音読させられた筆者らの、今も脳裏に染み付いて消し去れぬシーンの再現である。戦時「少国民」はまさにその教材で教育されたのであった。

同授業は、「日本国民は、恒久の平和を念願し……」「真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに……」「平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し」（憲法、教育基本法）という戦後民主教育の理念に対する真っ向からの挑戦である。「日の丸」「君が代」の強制と相俟って、新指導要領のもつ危険な本質がいよいよ露わになってきたといえるのである。（か）